

研究授業 6年 サイエンスコミュニケーション科

「自然災害に立ち向かう

清水窪子どもプロジェクト」

令和4年

11月30日(水) 5校時

6年2組

西澤 絢子教諭

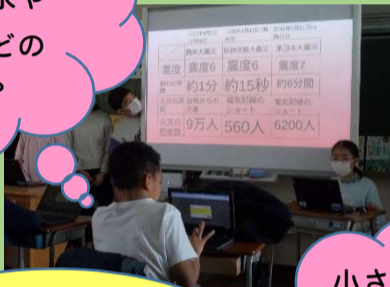
TT 坂本 大征 主任教諭



どのような内容や工夫（手立て）が、聞き手の自然災害への意識をより高められるのだろうか。

9/13時間

1週間分の水や非常食ってどのくらいかな？



自然事象との対話

ハリケーン対策は台風対策と同じでいいのかな？



避難所では一人当たりどのくらいの面積があるのかな？



仕組みをより詳しく、火災の広がりも触れた方がいいと思う。



小さい地震でも火災はおきるのかな？



児童相互の対話

農作物への被害は自分の班でも同じ内容だった。



被害を見た驚きでどのような行動をとってしまおうのかを具体的に知りたかった。



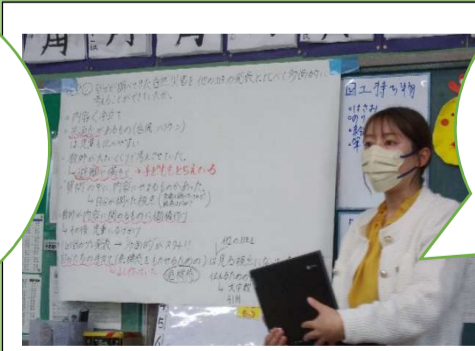
津波の動画で50cmの水深でも転倒してしまうことに危機感が高まった。



学級全体での対話

ライフラインの遮断はどの災害でも起こりうるということが分かったので、それに対する備えのデータを新たに組み込みたいと思いました。

モデル実験を見ると、仕組みが分かりやすく、災害への意識が上がったので、自分の班でも行いたいと思いました。



スライドの指導は、単元終了までにさらに指導の必要がある。



研究協議会

講師：元昭和女子大学教授 小川 哲男先生

災害による、交通や暮らしへの影響など、もっと身近に捉えられる手立てにするべきではないだろうか。



授業形態を1グループ対1グループにした方が、より多くの意見が出たのではないだろうか。



子どもたちは、発表グループの良い点や改善点を指摘し、さらに自分たちの発表内容との関連をも考えていて、最高でした。先生側は、具体的な手立てが明確でよかったです。これからは、単元ユニットに基づいて、教科学習とのつながりを大切に、既習との結び付きができるように支援していきましょう。